

春三月、それは微妙な季節の風情に満ちた時節である。とりわけ、近年では気候変動の影響なるものが始めたのか、お彼岸の時期に既に都心の桜が満開と聞くと驚くばかりである。当然、わが国立の桜も見頃であろうと、広い大学通りに出てみたが、未だ、三分咲き、景色のトーンは灰色である。巨大な一本の山桜が既に若葉を覗かせ、緑のガクと真つ白な花弁が堂々たる彩りを見せて、独特の存在感で独り気を吐いている。パリのシャンゼリゼを真似たという街灯も花が少ないが故に、そのデザインや造作が際立つのも面白い。パリには、何故か三月に訪れることが多かった。燦燦と降りそそぐ陽に映えたマロニエの芽吹きが広大な街を包む、感動の記憶が蘇る。

地下鉄を降り、「凱旋門」近くの地下道の階段を上がるうとしたとき、窪みのスペースに楽器を抱えたヒッピー風の若者達が居た。通行人達も立ち止まり、彼等を取り囲む。懐かしい音楽が始まり、その場にくぎ付けとなった。バッハの管弦楽組曲第二番の、第一曲のリアあることは瞬時にそれと判った。音楽院の学生達に違いない。地下道という音響環境の中で、その響きは神秘的でさえあった。世にいう「G線上のアリア」を聴き終えて、照り返しが眩しい舗道に出る。

それは、もう十五年前、パリの工作機械とオートメーション展示会・シンポジウムに参加した時の事だった。業界の同行者の友人の案内で、更にシャンゼリゼの右側を下り、左にエリゼ宮が見えるあたりで、赤い日よけのフードの似合う「アルザス」という立派な店構えのレストランに入る。うず高く盛られた貝類の山を客が座るカウンターが取り巻き、好きなものを取って食べる。勿論、生牡蠣を堪能した。上等の白ワインが注がれたことは言うまでもない。早春のパリの春景色を凌ぐ楽しい時間であった。店を出ながら自問する、はて、アルザスに海があったらどうか、未だに私のToDoリストに載ったままで。